

自身の「嘘」に対する確信の生まれ方 ～他者視点取得と懸念的被透視感から～ How We Can Build Confidence in Our Lie

石川 悟
Satoru Ishikawa

北星学園大学
Hokusei Gakuen University
ishi_s@hokusei.ac.jp

Abstract

In this article, how we can build confidence in own lie was investigated. The PC-story-game was prepared for lying, subjects have to lie twice to mother and friends in the game. After lying, subjects evaluated own lying processes especially appreciating one friend's point of view and sense of unwanted transparency, and subjects' confidence score to the estimated belief by the friend. The subjects showing high confidence score to the own lie had a high ability to appreciating friend's point of view and low sense of unwanted transparency. These results suggested that people having high confidence score in the own lie might have poor meta-cognition about own internal process or be soft on self-evaluation.

Keywords — **Confidence in own lie, Meta-cognition**

1. はじめに

人は嘘を吐く時、「自身の嘘によって相手を騙すことができた」という確信をどのように得ているのだろうか。嘘を吐いた相手から「騙された」と申告される以外、相手に自分の嘘が信じられたかどうかは分かることはない。また、懸念的被透視感[1]のように、嘘が見破られる感覚を持つことも多い。にもかかわらず、「自身の嘘によって相手を騙すことができた」という確信を持つことがある。確信を持つところまで行かなくとも、懸念的被透視感を感じつつも、「相手を騙せたのではないか」という感触や、「一時しのぎができた」という感じを手にする。

この感触や確信はどのように生じるのか。昨年の本学会の発表[2]では、個人の自己愛傾向や自尊心感情との関係に着目して分析を進めたが、明確な傾向は見られなかった。嘘を吐き、それを成立させる過程を考えると、自身および他者の思考や

感情についての内的状態の推定が必要であることが想像できる。その点から考えると、自身および他者の内的状態の推定の精度や、その推定内容への自身の自信の程度が、この「自身の嘘によって相手を騙すことができた」という確信を生み出している、という別の可能性が考えられる。そこで本研究では、嘘を吐く時に相手の立場に立った思考や自身の振る舞いについてモニタリングすることと、「自身の嘘によって相手を騙すことができた」という確信が生み出されることとの関係について検討した。

2. 方法

「自身の嘘によって相手を騙すことができた」という確信を得る過程を検討する嘘吐き場面は、パソコン上で操作するゲーム課題として用意し、ゲームの登場人物とキャラクターと「会話」をしながら被験者に嘘を吐かせることとした。

被験者 大学生 46 名(女性 29 名, 男性 17 名, 平均年齢 19.5 歳) が実験に参加した。

ゲーム課題 「被験者が歩きながらスマートホンを見ていたために、地下鉄の階段で老婆にぶつかり、突き落としてしまう」という出来事を、仲の良い友人 B, 被験者の母, 普段あまり会わない友人 C, のそれぞれの登場人物に対し、嘘を吐いて隠し続ける状況を用意した。嘘を吐く場面は出来事の翌日には友人 B と母から疑われる場面、翌々日には友人 B, および友人 C から 1 度／2 度と疑われる場面の合計 5 場面を作成した。嘘を吐く場面を複数回用意することにより、被験者に嘘を吐くための準備をさせた。

被験者が出来事を隠すための嘘のうち、「自身の嘘によって相手を騙すことができた」という確信について分析の対象としたものは、友人Cに対する場面（1回目/2回目）だった。普段あまり会わない友人Cに対する嘘を吐くときには、被験者は特定の人物に対してのみ当てはめ得る相手固有の内的状態を推定することはなく、被験者自身が普段おこないやすい過程によって嘘を吐くと考えられた。友人Cに対する嘘を吐くいずれの場面でも、まず友人Cとの会話文を示した後、その会話に続く文章を、テキストボックス内に2分以内で打ち込ませた。その後、次の質問紙へ回答させた。

質問紙 被験者がゲームを進めていく中でどのような考えを持ち嘘を吐くことにしたのか確かめる

ため質問項目を用意した（表1）。[3]を参考に、嘘を吐かれる相手に対する視点取得の有無を尋ねる質問項目（相手の視点取得：7問）、[1]を参考に嘘が見抜かれる不安感を尋ねる質問項目（懸念的被透視感：2問）および[4][5]を参考にして自身の嘘を評価させる質問項目（嘘の有効性評価：4問）、を用意した。

それぞれの質問項目は最初に友人Cに疑いを持たれた場面（1回目：『まさか犯人じゃないよね…？』と言われた場面で、自分を犯人だと思わせないための発言を記入した場面）、そして再度友人Cに疑いを持たれた場面（2回目：『あはは。疑っちゃってごめん。やっぱり〇〇大学の人なのか』という発言を聞き、自分を犯人だと思

表1. 質問紙に用いた質問文及び回答方法

	質問文	回答方法
相手の視点取得に関する質問	発言を考える時、発言を記入するまでの友人Cとの会話を思い返した。	6件法
	発言を考える時、自分の発言で友人Cの自分に対する心境がどのように変わるのか想像した。	6件法
	発言を考える時、自分の発言を聞く前の友人Cの心境について考えた。	はい/いいえ
	発言を考える時、友人Cから自分がどのように見えているか、「もし自分が友人Cだったら」と考えた。	4件法
	発言を考える時、友人Cがどのような心境だったか、「もし自分が友人Cだったら」と考え、友人Cの心境になってよく理解しようとした。	4件法
	発言を考える時、友人Cが自分と事件をどう捉えているのか、「もし自分が友人Cだったら」と考え、友人Cの心境になって考えることは困難だった。	4件法
	発言を考える時、「もし自分が友人Cだったら」と考え、自分の発言によって友人Cの心境がどのように変化するか考えた。	4件法
懸念的被透視感に関する質問	おばあさんを突き落としていないことにする発言を考える時、自分の発言が真実ではないことを見抜かれる不安を感じた。	6件法
	おばあさんを突き落としていないことにする発言を考える時、おばあさんを突き落としたことがばれることを考えて、不安を感じた。	6件法
嘘の有効性評価に関する質問	自分の発言は、友人Cを信じさせることができた。	はい/いいえ
	「自分はおばあさんを突き落とした犯人ではない」と、友人Cに思わせるための発言を考えることができた。	6件法
	おばあさんを突き落とした犯人が自分であることを見抜かれない発言を、考えられた自信がある。	6件法
	発言を考える時、自分がどのような発言をしようと、友人Cは自分の発言に対して疑いを持たないと思った。	6件法

わせないための返事を考えた場面) のそれぞれの場面の直後に、各場面の自身の状況を思い出させて回答させた。

手続き 被験者にはパソコンの画面が見えない状態で質問紙を配布し回答方法を教示した後、パソコンの画面を見える状態にし、ゲーム課題について、「主人公を自分とを考えて進めること」、「ゲームの途中で質問紙に回答する場面があるためページ数をよく確認すること」の2点を教示し、ゲーム課題を始めさせ質問紙に回答させた。

3. 結果

①「相手の視点取得」と「嘘の有効性評価」:
「相手の視点取得」と自身の「嘘の有効性評価」との関係を検討した。その結果、嘘を吐いた後の「相手の視点取得」と自身の「嘘の有効性評価」との間に関連性が見られた。「相手の視点取得」が平均より高い「高群」の被験者は低い「低群」の被験者よりも、「相手を操作する発言ができた」と評価し (図 1.左: $t[44] = 3.03, p < .01$), 「相手を操作した発言に自信がある」と評価した (図 1.右: $t[44] = 2.85, p < .01$)。

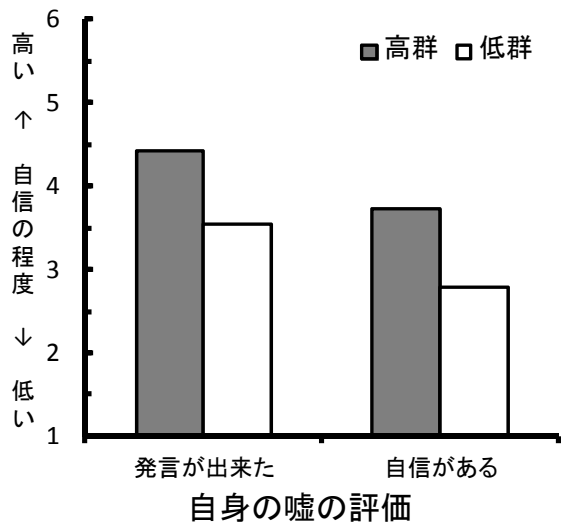


図 1. 「相手の視点取得」の程度と「嘘の有効性評価」

②「懸念的被透視感」と「嘘の有効性評価」:
「懸念的被透視感」と自身の「嘘の有効性評価」との関係を検討した。その結果、「懸念的被透視感」が平均より高い「高群」の被験者は低

い「低群」の被験者よりも、「相手を操作した発言に自信がある」という評価が低かった (図 2: $t[44] = 2.40, p < .05$)。

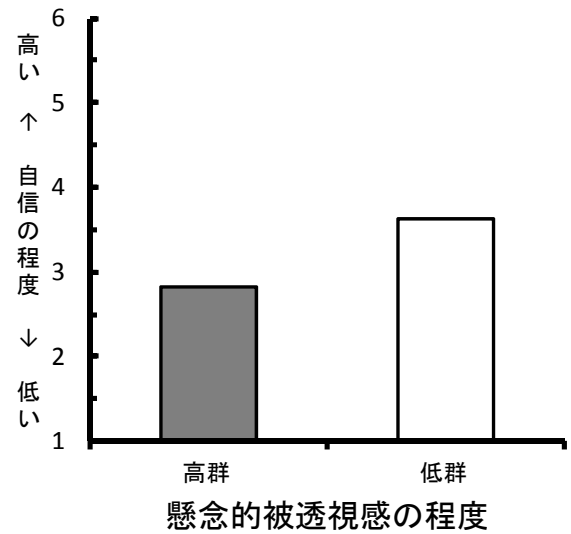


図 2. 「懸念的被透視感」の程度と「嘘の有効性評価」

4. 考察

嘘を吐いた後の「相手の視点取得」とは、自身が吐いた嘘を聞いた相手について、その嘘を信じたかどうか推測していることになる。この「相手の視点取得」が高い被験者の自身についての「嘘の有効性評価」が高くなった、ということは、「相手の視点取得」できているものほど自身の嘘に自信を持っていることを示し、一見妥当な結果だとも考えられる。留意すべきは、この「相手の視点取得」と自身の「嘘の有効性評価」ともに、被験者自身による主観的な評価である点である。「相手の視点取得ができた」と自身で評価していても、その推測内容は「実際の相手の視点」とは異なる可能性がある。したがって、「相手の視点取得ができた」と評価した被験者は、自身についての（主観的な）客観的評価が十分におこなえていない、すなわち、嘘を吐いているときの自身についてのメタ認知が不十分なことが、このような結果を生み出したとも考えられる。「相手の視点取得」をおこなう推測の正確さとメタ認知能力の高さから、さらなる検討が必要となった。

一方、嘘や犯行がばれるのではないかと案じる懸念的被透視感が高い被験者は「嘘の有効性の評

価」が低く、自分の発言が嘘であることを見抜かれたという思いを抱いた場合、嘘に対する自信は生じにくいことが示唆された。

今後、自身が推定した他者の内的過程の精度に対する自信の程度（主観的評価）および実際の推定精度、および両者と懸念的被透視感との関係について検討を進めて行くことにより、自身が推定した自身および他者の内的過程に対する自己評価／メタ認知の程度がどのように自身や不安に類する感情と関わっているのか、明らかにできると考える。

参考文献

- [1] 大幡直也, (2006) “被透視感の強さを規定する要因：自己への注意と他者の視点取得についての検討”，社会心理学研究, Vol.22, No.1, pp.19-32.
- [2] 石川悟, (2014) “自身の「嘘」に対する確信の生まれ方 ～予備的検討～”，日本認知科学会第31回大会発表論文集, pp.774-776.
- [3] 桜井茂男, (1988) “大学生における共感と援助行動の関係--多次元共感測定尺度を用いて”，筑奈良教育大学紀要 人文・社会科学, Vol.37, No.1, pp.149-154.
- [4] 藤沢雄太・葦原摩耶子・満石寿・前場康介・竹中晃二, (2010) “保健指導の結果に関する帰属様式と自己効力感の関連”，日本健康教育学会誌, Vol.18, pp.136-147.
- [5] 大内善広, (2007) “文脈依存性から見た学業自己効力感の因子構造の検討--学業自己効力感尺度作成の試み”，学術研究教育心理学編, Vol.56, pp.11-24.